日本語学習者における接続助詞の習得のあり様

-社会言語的側面と談話的側面からのアプローチ-

李吉鎔* · 權恩熙**
ih_kilyong@cau.ac.kr, beforebabel@hotmail.com

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 調査の概要および分析項目
2.1. 調査の概要と談話資料
2.2. 分析項目
Ⅲ. 節末の丁寧語と接続助詞の習得との関わり
3.1. スタイルの認知によるフォーマルな形式の習得
3.2. 意味的な制約によるフォーマルな形式のノデの回避
Ⅳ. 接続助詞終了型発話の習得
4.1. 接続助詞終了型発話の使用実態
4.2. ケド類の用法
Ⅴ. まとめ

Abstract

This paper analyzes the use of “te”, “kara”, “kedo” in Japanese found in the formal speech of 4 Korean learners living in Osaka, Japan. The data was collected through a longitudinal research where each subject was interviewed 3 times. It consists of 12 speeches with a total of 8 hours. The analysis from the grammatical, sociolinguistic and discourse points of view showed the following results.

The learners first acquire the forms which have several different uses based on the autonomy of the sentence. From the sociolinguistic point of view, it was noticed that the learners acquire the “keredomo” and “node” perceived as formal style forms, but they tend to use the new form “nde” and not “node” because of semantic constraint.

As for the speech, in the case of the utterances finished with postpositional particles, the learners acquire the use of those particles which mark the consideration of interpersonal relations.

* 중앙대학교アジア문화학부부교수, 社会言語学専攻.
** 中央大学校大学院日語日文学科修士課程, 日本語学専攻.
This research was supported by the Chung-Ang University Research Scholarship Grants in 2011.

교보문고 KYOBO Book Centre

This research shows that grammatical competence is closely related to sociolinguistic and discourse competence and that the learners' language competence should be analyzed from a holistic point of view.

Key Words : 接続助詞、スタイル、意味的制約、接続助詞終了型発話、対人関係への配慮
conjunctive particles, style, semantic constraints, utterances finished with conjunctive particles, consideration of personal relations

Ⅰ. はじめに

本研究は、韓国人日本語学習者の日本語談話におけるテ・カラ・ケドといった二つの文をつなぐ表現形式(以下、接続助詞[1])とする)の運用実態とその習得における特徴を、文法的、社会言語的、談話の諸側面から考察するものである。本研究に先行し、文法能力の習得に焦点を当てた李吉鎔(in press)では、学習者は文としての独立性の強さを手がかりに接続助詞を習得すること、多義語など用法の広いものを先に習得することなどが明らかになった。こうした知見を支持した上で、ここでは節末の丁寧語などとの共起関係および接続助詞終了型発話に注目して、次の2つの観点から社会言語的側面および談話的側面での習得の様相を明らかにする。

(1) 接続助詞の習得には節末の丁寧語やノダ形式など前後の言語的環境が関与するのか
(2) 接続助詞終了型発話の場合はどのような用法を先に習得するのか

(1)は社会言語的な側面からのアプローチであるが、代表的な研究として渋谷(1997)が挙げられる。まず、節末での丁寧語の使用について、南(1993)は、節の

1) 接続助詞終了型発話を含む。自然談話の話しことばに多く見られる、述語で終わらない発話文において、接続助詞が逆接や因果関係などの本来の機能を失い、終助詞的に使われることがある。本研究では、こうした接続助詞終了型発話の習得には接続助詞の習得との強い関連があると考え、分析の対象とする。

교보문고 KYOBO Book Centre

内部におさまる様々な文法カテゴリーを分析するなかで丁寧語にも言及し、基本的にC類(カラ、ケド、ガ、シ)とB類(タラ、テモ、テカラ、ノデ、バ)には丁寧語が入るが、付帯状況を表すテや同時動作を表すナガラなどのA類(タリ、ナガラ)にはおさまらないとした。渋谷(1997)は、上の分類に従い、日本語母語話者と学習者の授業における研究発表というフォーマルな談話における従属節末の丁寧語使用について考察したものである。その結果、(1)形容詞類(否定/形容詞)の場合には形態的な処理の複雑さや日本語内部での規範の不安定さといった要因が丁寧語を用いられにくくしている、(2)前件と後件の意味的な緊密度が高いほど丁寧語が使われにくい、といった制約条件が働くことを見出した。

一方、接続助詞がノダ形式と共起した場合には、小金丸(1990)も指摘しているが、ノダカラやノデスカラのようにノダ形式に後接する原因・理由表現は話し相手を叱咤するニュアンスを含むこともある。また奥山(2006:292)によれば、ンダケドは聞き手の注意を喚起する働きをするため、多用されると聞き手の注意が頻繁に喚起されざるを得なくなり、その結果聞き手を疲れさせるという。こうして接続助詞の習得には節末の丁寧語やノダ形式との共起関係が絡んでいる可能性があり、その究明は重要な課題である。本研究の第Ⅲ節で分析する。

次に、接続助詞は本来、節と節とをつなぎその関係を表すという機能を持つが、談話場面においては後節を伴わない形で用いられることも多く、「対比、前置き、提題、挿入、終助詞」といった多様な機能(国立国語研究所1951)を持っていることが知られている。このような表現形式については、「従属節として用いられる場合とは異なる独自の表現形式」として認められ(国立国語研究所1951)、そこに終助詞的意味が生じるという指摘(高橋1993)や、そのような表現が特定の発話行為と結びついているという指摘(三原1995)がなされてきた。これらの研究において考察対象が文から発話行為へと拡大され、またケド類の談話機能などが明らかにされてきている(永田2001)。すなわち、佐藤(1993)、白川(1996)、曺英南(2000)、朴仙花(2008)、이은미(李恩美2012)などによって、「発話緩和や発話補完、行為誘導、理解誘導」などといった談話機能が認められてきた。こうした接続助詞終了型発話のさまざまな用法のうち、どのような用法から習得するのかといった談話的側面からのアプローチは、学習者における接続助詞の習得

교보문고 KYOBO Book Centre

の全体像を明らかにするのに欠かせないものである。本研究の第Ⅳ節で接続助詞終了型発話の習得のあり様について分析する。

Ⅱ. 調査の概要および分析項目

2.1. 調査の概要と談話資料

本研究では、大阪に在住する韓国人日本語学習者4名の日本語によるフォーマルな談話資料(それぞれ3回の継続調査による全12談話;計8時間分)を分析資料として用いる。談話資料は、学習者と初対面の日本語教師または日本語を研究する大学院生との2者間会話を収録したものである。そのため、談話の格式度(formality)はかなり高いことが予想され、規範として丁寧語の使用が要求されるフォーマルな談話資料である。収録した談話は、宇佐美(1997)の『日本語の基本的な文字化の原則(BTSJ)』を応用し、構造的な文を単位に文字化した[2)]。

ここで、表1に学習者の日本語学習歴などの情報についてまとめ、次頁の表2に話し相手などの談話情報を示す[3)]。以下では、学習者をKS・YP・HT・JHとアルファベット2文字によって示し、分析および考察では、学習者のそれぞれの日本語運用能力の相対的な発達段階に応じて『KSの1期−2期−3期、YPの1期−2期−3期、HTの1期−2期−3期、JHの1期−2期−3期』の順に並べて表示する[4)]。

---

2) おおよその文字化の原則および記号は、次の通りである。
(1) 漢字仮名混じりの分かち書きをし、長音は『ひらがな表記』、母音の伸ばしは『ー』で示す
(2) 韓国語及び外来語の韓国音読みはハングル表記し、必要に応じて≪ ≫の中に日本語訳を施す
(3) 資料のなかの人名、地名などの個人情報に関わる固有名詞は、すべて仮名および架空の地名である

3) 調査方法や談話資料の詳細は李吉鎔(2008・in press)に譲るが、論文の自己完結性の確保のため、ここでも概略を示しておく。

4) 本研究では学習者の日本語運用能力の判定テストは行っていない。したがってそれぞれのレベルを明記することは難しいが、統語面の発達段階や伝達動詞の使用状況などを基に、学習者間の相対的な日本語運用能力の判断を行っている。

교보문고 KYOBO Book Centre

表1 学習者情報

学習者	年齢	居住歴 ／（母国での日本語学習歴）
KS	22	0-22:韓国華城・水原市、22-:大阪府 ／（週約5時間・6ヶ月間）
YP	28	0-18:ソウル、18-22:大田市、22-28:ソウル、28-:大阪府 ／（週約6時間・6年間）
HT	24-25	0-24:韓国安養市、24-25:大阪府 ／（週約3時間・9年間）
JH	28	0-24:ソウル、24-25:東京都、25-28:ソウル、28-:大阪府 ／（週約6時間・5年間）

表2 話し相手および談話情報

		第1回目	第2回目	第3回目
学習者	KS	佐世保市方言話者(男)・28歳 2004.04.23・40分間使用	姫路方言話者(男)・30歳 2004.08.15・40分間使用	山口方言話者(女)・30歳 2005.01.18・40分間使用
	YP	佐世保市方言話者(男)・28歳 2004.04.23・40分間使用	姫路方言話者(男)・30歳 2004.07.31・40分間使用	山口方言話者(女)・30歳 2004.12.11・40分間使用
	HT	新潟方言話者(男)・24歳 2001.05.14・40分間使用	新潟方言話者(男)・25歳 2001.09.16・40分間使用	京都方言話者(男)・28歳 2002.01.31・40分間使用
	JH	佐世保市方言話者(男)・28歳 2004.04.23・40分間使用	姫路方言話者(男)・30歳 2004.07.31・40分間使用	山口方言話者(女)・30歳 2004.12.11・40分間使用

2.2. 分析項目

本研究では、韓国人日本語学習者のフォーマルな談話におけるテ・カラ・ケドといった接続助詞（接続助詞終了型発話を含む）を分析の対象とするが、次の例[1]において、(a)は接続助詞であり、(b)は接続助詞終了型発話である。(b)では、話者の発話意図は接続詞ケレドモに先行する発話「私の場合はそんなに(少しずつ)飲む」によってすでに伝達されており、ケレドモは必須ではない。

[1] [HT1](韓国の飲酒文化)
511JF：あー えっ ちょっとずつ 飲んじゃ だめです?
512HT1：じゃー まあ そうな そんなに 飲む 人も (a)**いるんだけど**、わたし≪私≫の 場合は そんなに (b)**飲むんですけれども**。
513JF：あ そんなに 飲むんですか?{笑い}
514HT1：あー ま 아니 一気じゃなくて ちょ //ちょっとずつ/。

分析の対象となる用例であるが、まず、語彙的、統語的、また意味的に的確ではなくても、当該形式が発話されていれば分析の対象とする(例[2])。

교보문고 KYOBO Book Centre

[2] [KS1](家で料理を作ること)

01JF : いっ 一回も? つくらない。

202KS1 : お腹が **したいですから**[お腹がすいた、の意]、어ー その時は(JF : うん)たっ つくる つくります。

203JF : 何を つくりますか。

しかし、話し相手に発話を遮られ、当該形式が完全に発話されないもののような例は考察から省いた(例[3])。

[3] [JH2](韓国の大学)

106JH2 : で あの あの なん 最初は 両親 ち 地方の 学生 (JF : うん) こう 受験生は 両親と 来る 場合が **あるんですけれ**(JF : はいはい)**で** 両親のほうから あの 言われるんですね。

なお、カラとノデが互いに対立しない「~だろうカラ/~カラです/~のは~カラだ」のような構文も当然除くべきであるが、今回の学習者談話には用いられていない。

Ⅲ. 節末の丁寧語と接続助詞の習得との関わり

本節では、節末における丁寧語(デス・マス)の有無を言語変項とし、学習者の接続助詞の習得との関わり方を明らかにする。規範として丁寧語使用が要求されるフォーマルな談話において、一部の節末においても丁寧語使用が必要な箇所がある。まず、次の表3に節末の丁寧語との共起関係に注目しまとめて提示する。表中の(丁)は丁寧語に後続する接続助詞を表し、(普)は丁寧語の使用のない箇所である。なお、ノニ、ナラ、バ、タリ、ナガラなどの接続助詞には丁寧語が使用されないため表3に入っていない。

교보문고 KYOBO Book Centre

表3 節末の丁寧語との共起関係

		KS			YP			HT			JH			合計
		1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	
ガ	(丁)	-	18	-	-	-	-	3	-	1	2	2	-	**26**
	(普)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	**-**
ケレドモ	(丁)	-	-	9	23	29	20	21	7	60	56	42	68	**335**
	(普)	-	-	2	-	1	-	-	-	2	-	-	-	**5**
ケド	(丁)	4	7	21	2	6	1	1	8	1	1	1	2	**55**
	(普)	-	-	-	1	7	2	10	26	13	-	-	-	**59**
ノデ	(丁)	-	-	-	9	4	1	1	5	9	1	-	-	**30**
	(普)	-	-	-	7	7	3	17	12	5	-	-	1	**52**
ンデ	(丁)	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	**1**
	(普)	-	-	-	-	6	6	-	-	39	29	43	14	**137**
カラ	(丁)	9	6	3	-	1	3	3	1	-	1	-	2	**29**
	(普)	-	4	15	2	5	20	22	20	20	2	3	1	**114**
シ	(丁)	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	**2**
	(普)	-	-	5	5	7	4	18	21	38	18	9	18	**143**
ト	(丁)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	**2**
	(普)	-	-	-	1	-	2	-	-	-	17	23	15	**58**
テ	(丁)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	**1**
	(普)	4	25	31	34	51	43	42	13	70	53	81	63	**510**
合計		**17**	**60**	**86**	**84**	**124**	**105**	**138**	**113**	**261**	**182**	**205**	**184**	**1559**

上の表からは、以下のことが読み取れる。

(1) 学習初期から丁寧語とのみ共起するかほぼ丁寧語と共起し、フォーマルな形式として用いられるものがある(ガ、ケレドモ)。

(2) 初期は丁寧語と共起するが、徐々に丁寧語と共起しない方向に変化するものがある(ケド、カラ)。ケドはKS・YP・HTにかけて変化していく様相がうかがえる。最も日本語能力の高いJHはケドをほとんど用いていない。

(3) 一方、カラについては、KSやHTの個人内で変化をしている。特に、KSではノデ・ンデの使用がないにも関わらず丁寧語と共起しない方向へと変化していく。

(4) 学習初期から丁寧語と共起せず、ほぼカジュアルな形式として用いられるものがある(シ、ト、テ)。これらに関してはスタイルによるバリエーションと関わらないと思われる。

以上から、南(1993)のC類(カラ、ケド(ケレドモ)、ガ、シ)とB類(タラ、テモ、

교보문고 KYOBO Book Centre

テカラ、ノデ(ンデ)、バ)の一部の接続助詞の前に丁寧語が用いられ(下線の処理を施したもの)、一部は丁寧語が用いられないことがわかる。また学習者間で揺れている様子も確認されるが(ケド、カラ、ノデ)、以下で詳細に検討していく。

3.1. スタイルの認知によるフォーマルな形式の習得

まず、学習初期のKSはケドのみを使用し、KS2になるとケドとともにガを使用する。このガについては、KS2以降はほとんど使用されることがない。第二言語習得段階の初期に見られる「学習言語の複製期[5]」の特徴と考えられる。その後、KS3からはケドとともにケレドモが用いられるようになり、「ケド→ケレドモ」の順に習得が進むことがわかる。そして、学習初期のKSを除き、学習者YP・HTは、次の例[4]からも窺えるように、ケレドモの前にはほぼ丁寧語を使用するが、ケドの前には丁寧語を使用しないことが多い。

[4] [HT3](大学での専攻)
205HT3：まー はっきりは **ないんですけれども**。
206JF：はい。
207HT3：前から ちょっと 勉強したいのが あの 経営 **関係なんですけれども**、(JF：はい)流通の 関係(JF：はい)で これは **勉強したいんだけど**、何が 勉強したいかだけが ちょっと はっきり 決めてない かったんですよ。

スタイルによるバリエーションとしてフォーマルな形式のケレドモに対し、ケドをカジュアルな形式として捉えていることが理解される。KS1からKS3までは丁寧語と共起していたケドが普通形式と共起するようになったという変化の刺激材はフォーマルな形式と認知されるケレドモの習得である。最も日本語能力の高いJHはケドをほとんど用いておらず、フォーマルな談話ではフォーマルな形式のケレドモを用いるべきだという意識がうかがえる。

一方、学習者談話においてカラはほぼ普通形式と共起し(例[5])、ノデは丁寧

5) 学習言語の複製とは、学習者が教室で学んだ語形や表現をそのまま複製して使用することを意味する。

교보문고 KYOBO Book Centre

語とも普通形式とも共起することが見て取れる(例[6])。

[5] [HT1](日本語の漢字)
806HT1：もう 聞いたら 発音が **聞こえるから**。
807JF：うん あ そっか そっか そっか
808HT1：はい。
809JF：と 日本語は その ど どうだっ どうですか? 難しいですか。やっぱり。
810HT1：も 韓国語と **似ているから** そんなに、(JF：それほどではない)難しくないっと 思って 始まったんですが≪始めたんですが≫、(JF：うんうんうん)漢字が **多いから**。{笑い}

[6] [HT2](9.11テロ事件)
214HT2：だいてい 自分ーが なくなって 自分の 家族が ま なんか 豊かな生活が(JF:うんうん)できるーだと 思いますよね?
215JF：うん 大丈夫っという 感じが
216HT2：とか 神様の だめに 自分の 命を なくなっても(JF:そうそうそうんうんー)**強いんですので**、なんか しんど≪信徒≫が なんか 神様 信じる ごとが めっちゃ **強かったので**、(JF:うんうん)そのことが・・・。
217JF：まー ですから やっぱり そいう。
218HT2：その人だちを 見れば なんか 経済的とか 全部 余裕が **ないんですので**、(JF：あーはーはー)も なんか(JF:うんー)死んでも いいし。{笑い}

KS1・KS2などにおいて丁寧語と共起していたカラが丁寧語との共起から普通形式との共起へと変化したことの背景にはおそらくノデの存在があろうと推察される。ケドとケレドモにおけるスタイルの対立と関連付けると理解されやすい。なお、普通形式と共起するンデはノデの母音脱落形であり、ノデよりは砕けた形式なのだが、学習者のカジュアルな談話にはほとんど出現しないことからもうかがえるように、カラよりはフォーマルな形式と位置づけられる(李吉鎔2008)。

[7] [HT3](日本人の友人)
586HT3：ま その人とは ま 結構 年が **離れているんで**、ま 十歳 'じゅっさい' 以上が **離れているんで**、ま なかなか **会えないんですので**。

교보문고 KYOBO Book Centre

ところで、学習者がカラを普通形式と共起して用いるという事実は、この分野の基礎となる研究である辻村編(1991)の説明と衝突するところである。従属節のなかでの丁寧語使用について、辻村編(1991:384)は次のようにまとめている。

(a) 文末およびいわゆる接続助詞「が」「から」の前だけに「です・ます」を置く
(b) 接続助詞「ので」「のに」「て」「と」および「たら」の前にも「です・ます」を置き、「ますので」「ですのに」「ますと」などと使う
(c) 名詞の前にも「ます」を置き、「これからお渡しします資料を御覧下さい」などと使う
(d) 「そうすると」「したがって」「続いて」など、接続詞的な語句の中にも「ます」を使い、「そうしますと」「従いまして」「続きまして」などという
(e) 「～ませんです」「～ますです」式のいい方をする

このうち、(a)が最も一般的で、(b)、(c)となるにつれ、丁寧な感じが強くなる。しかし、本研究の学習者談話資料において、(a)のガの前には丁寧語が入るが、カラの前には丁寧語が入らないという事実や、そもそも(日本語能力が最も高いJHなどにおいて)フォーマルな談話ではカラの使用が少ないことなどが指摘される。これらのことから判断すると、接続助詞の習得は節末の丁寧語使用など、談話のフォーマリティに影響を受けるということが言えそうである。

次では、ケレドモはほぼ丁寧語と共起するが、ノデは丁寧語とも普通形式とも共起することについて、意味的な制約がノデと丁寧語との共起を阻止することを論じる。

3.2. 意味的な制約によるフォーマルな形式のノデの回避

ここでは原因・理由表現形式を取り上げ、学習者はカラ・ノデ・ンデの3つのスタイルを習得し、使い分けており、そこには節末の丁寧語やノダ形式の使用と関連して意味的な制約があること、その意味的な制約により「丁寧語+ノデ」が用いられにくくなり、その結果「普通形式+ンデ」に収斂することについて述べる。

まず、表3をもとにカラ・ノデ・ンデの使用と節末の丁寧語との関係をまとめ

교보문고 KYOBO Book Centre

なおすと、次のようになる。(丁)は前接形式が丁寧語を、(普)は前接形式が普通形式のことを指す。

(1) カラのみ使用する(KS)。カラの前接形式は(丁)から(普)へと変わる。
(2) カラ・ノデを使用する(YP1・HT1・HT2)。カラはほぼ(普)と共起し、ノデは(丁)とも(普)とも共起する。
(3) カラ・ノデ・ンデを使用する(YP2・YP3・HT3)。カラ・ンデはほぼ(普)と共起し、ノデは(丁)とも(普)とも共起する。
(4) ンデを主に使用する(JH)。ンデは(普)のみと共起する。

以上のことから、学習者はまずカラを習得するが、フォーマルな談話ではカジュアルな形式のカラの使用が抑制される様子が見て取れる。しかし、逆接表現形式のケレドモが多用されるように、フォーマルな形式のノデが用いられてよさそうであるが、ノデが用いられにくくなっていることは注目に値する。たとえば、例[8]及び例[9]ではカラとノデが丁寧語と共起する様相がうかがえるが、例[10]や例[11]のようにカラとノデが丁寧語と共起しないこともある。

[8] [HT1](ふるさとの風景)
290HT1：韓国は アパト≪アパート≫方が いい もの。{笑い}
291JF：アパートが
292HT1：だから 名前が **反対なんですから**、(JF：うん)普通は 아파트≪アパート≫が 集まっているんですよね。
293JF：あああ アパート こ 高級な アパートとっかいう、

[9] [HT2](韓国の歴史)
564HT2：その한강≪漢江≫という ハン川↑(JF：あ、はいはいはい)これ 今 ちょっと 大きな 川ですけれども、その川を 持っている 人が なんか 強いな 感じが **あるんですので**、(JF：うんうん)三国が だいてい その한강≪漢江≫の となりを 自分の 国に 入る だめに 戦争 つっと≪ずっと≫したんですよ。

교보문고 KYOBO Book Centre

[10] [HT1](ふるさとの風景)

184HT1：タｋシ≪タクシー≫を≪に≫乗る 場合は **忙しいから** 早く 行こうと 思って タｋシ≪タクシー≫乗るんですよ。

185JF ： もう へえー はいはいはいはい

186HT1：だけど まあ 日本の 場合は まあ 道を **知らないから** タｋシ≪タクシー≫ 乗るんじゃないんですか?

[11] [HT1](日本語の勉強)

743HT1 ： だけど まあ そんなに一生懸命 **べんきょ≪勉強≫しなかったので**。

744JF：一生懸命、や でも その割りに いや 一生懸命勉強しないって 割には ええ もう

745HT1：わだし≪私≫の 場合は 座って 勉強 ちょっと しないんですよね。

746JF ： //あ も 話す

747HT1 ： //あ 人と 会って 話す ごと≪こと≫が **好きだったので**、(JF ： あー)まあ これが ほしいだと 思ったんですよね。

ケドとケレドモ、カラとノデ・ンデにおけるスタイルの対立という点から検討すると、学習言語の複製期にあるためノダ形式の使用が不安定な学習初期のKSを除き、他の学習者におけるケレドモはノダ形式と共起した「ンデスケレドモ」がほとんどであり(例[4]など)、またカラやノデが丁寧語と共起するとほぼノダ形式と共起することが指摘できる(例[6]～例[9]の下線部を参照されたい)。反対に、カラとノデ・ンデが丁寧語と共起しなければノダ形式とともに用いられることは少ない(例[10]・[11]など)。

これらのことから学習者談話において、ンデスカラやンデスノデが使用されにくいことがわかる。逆接表現のンデスケレドモ(以下、「ノダケド」とする)は使用されるが、ンデスカラやンデスノデ(以下、「ノダカラ」とする)が使用されにくいことに関しては、節末の「ノダカラ」は話し相手を非難する意味合いをも持ち合わせているといった意味上の問題が関与することが考えられる。それは、節末に逆接表現の「ノダケド」を用いて話し相手の知らない未知の情報を提供することが可能であるが、「ノダカラ」はそうには使えない(野田1995)ことと関連がある。「ノ

교보문고 KYOBO Book Centre

ダカラ」の文は前件の事態を相手が知っているときに用いられるが、話し相手の情報の保持に関する認識が不十分な場合に用いられると叱責の含意を表し、FTAになり得るのである[6)]。

こうして「ノダカラ」は話し相手を非難する意味合いを帯びやすいという意味的な制約のため、回避されたと考えることができよう。その結果、フォーマルな形式のノデが、丁寧語やノダ形式と共起しにくいがために用いられにくくなり、その代わりに「普通形式+ンデ」の使用に収斂されると理解されるのである。つまり、「ノダカラ」における意味的な制約により新形式ンデの習得が促進されるのである。

Ⅳ. 接続助詞終了型発話の習得

本節では、接続助詞の談話的側面に焦点を当て、日本語の話しことばの大きな特徴の一つである接続助詞終了型発話の習得について分析する。まず§4.1.で接続助詞終了型発話の使用実態をまとめ、学習者ごとの特徴について述べる。次に、§4.2.ではケド類を取り上げ、その用法を「言い残し、省略、対比、提題、挿入、前置き、終助詞、その他(不明)」に分類し、その習得の様相について考察する。なお、一つの発話の中で倒置されて現れた場合(白川1996のいう倒置的用法)は接続助詞と認めた。

4.1. 接続助詞終了型発話の使用実態

まず、表4は接続助詞終了型発話の全体像を示したものである。表中の「−」は使用数ゼロ、空欄は接続助詞がそもそも使用されていないことを表す(Ⅲ節の表3を参照されたい)。

6) ノダカラは命令や依頼に先立って用いられる場合が多く、その命令や依頼を発するべき状況をつくった相手を非難する意味合いを帯びやすいことも指摘されている(小金丸1990)。

교보문고 KYOBO Book Centre

表4 接続助詞終了型発話の使用実態

	KS			YP			HT			JH			合計
	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	
ガ		-					2		1	1	-		**4**
ケレドモ			6	2	6	4	6	1	18	3	-	18	**64**
ケド	-	-	10	-	6	-	-	4	1	-	-	1	**22**
ノデ				3	1	1	7	4	7	-		-	**23**
ンデ					3	1			18	5	10	4	**41**
カラ	3	-	8	-	2	3	8	6	8	-	-	1	**39**
シ			2	1	2	1	8	6	25	-	1	3	**49**
テ	-	-	7	6	8	3	5	-	13	4	4	3	**53**
合計	**3**	**-**	**33**	**12**	**28**	**13**	**36**	**21**	**91**	**13**	**15**	**30**	**295**

表4からは、以下のことがわかる。

(1) 接続助詞終了型発話の種類はガ、ケド類(ケレドモを含む)、ノデ類(ンデを含む)、カラ、シ、テの6種類である。そのうちケド類が82例と最も多く、次いでノデ類(64例)・テ(53例)・シ(49例)・カラ(39例)の順である。

(2) 各学習者において、おおむね第3期に接続助詞終了型発話の使用が増える。なお、YPの場合は第2期に最も多く使用されている。KS・HT・JHの第3期やYPの第2期における接続助詞終了型発話の増加を支えているのはケド類である。

(3) その他、HTは第3期にンデ、シの使用が多く、反対にJHはンデ、シの使用が少ない。

4.2. ケド類の用法

以下では接続助詞終了型発話のうち、ケド類(ガ・ケレドモ・ケド)に焦点を絞って、学習者はどのような用法から習得するのか、その習得のあり様について論じる。表5では、接続助詞終了型発話は各学習者の第3期に多い(但しYPは第2期)こともあって、各学習者の第1期～第3期を統合して扱う。また表中の「不明」は用法の分類が困難なものである。

교보문고 KYOBO Book Centre

表5 ケド類の用法

	KS	YP	HT	JH	合計
言い残し	2	-	2	-	**4**
省略	1	-	-	2	**3**
対比	-	-	2	1	**3**
提題	2	-	7	3	**12**
挿入	-	3	11	7	**21**
前置き	4	4	7	5	**20**
終助詞	2	11	4	5	**22**
不明	5	-	-	-	**5**
合計	**16**	**18**	**33**	**23**	**90**

上の表5からは、以下のことが読み取れる。

(1) 4人の学習者に共通して現れるのは、前置きの用法と終助詞の用法である。これらの用法は対人関係と関連がある。
(2) 日本語能力の高い学習者HTおよびJHは、相対的に提題用法、挿入用法が多い。これらの用法は情報の伝達と関連がある。
(3) 学習初期のKSには分類不可の不明なものが多い。

学習者の談話資料における接続助詞終了型発話のうちのケド類の基本的な用法としては、話し相手の注意を喚起する働きを持つ前置きとしての役割(例[12])と、円滑なコミュニケーションを行う上で重要なストラテジーとなり、話し手の発話意図が強く直線的にならないように緩和する終助詞としての働き(例[13])を持つことが挙げられる。これらは曺英南(2000)のいう「発話緩和」に相当するものである。

[12] [YP2](将来の職業)**<前置きの例>**
123JF：ええ YPさんは どんな 仕事が したいですか。
124YP2：かい 会社ーの ほうが(JF：あー)合うと 思いますけど。{笑い}
125JF：あ そうですか。
126JF：え? どうして?

교보문고 KYOBO Book Centre

127YP2 : なんか［すっと息を吸う］そう そうですね。
128YP2 : あまり なんか 詳しく 考えた ことは **ないけど**、(JF : うん)
129YP2 : うんーー そうですね。
130YP2 : 難しいですね。{二人笑い}

[13] [KS3](日本語学校の授業)**<終助詞の例>**
511JF : うん 周りの 畑は みんな たとえば キュウリも(KS3 : はい)こんな 大きいのが できますけど 母の 畑だけ{二人笑いながら}こんな 小さいのしか、(KS3 : おー そうですか)うん できません。
512KS3 : 小さい ものが おいしいと **思いますけれども**。{二人笑い}
513JF : でも ほんとに 小さいーですよ。{二人笑い}
514KS3 : おー そうですか。{二人笑い}

一方、日本語能力の高い学習者は、ケド類を用いて、前もって話し相手に背景となる情報を与えたり(例[14])、メッセージを追加または修正したり、メッセージについてのヒントを与えたりするのである(例[15])。이은미(李恩美2012)のいう『補完(発話内容の補強)』に値するもので、提題用法、挿入用法として用いられるケド類は、知識・伝達の側面に関わり、必要な情報を随時補い、情報のやり取りを再構成することが出来るという点で、会話において重要な役割を果たしているといえる。

[14] [HT3](国際免許)**<提題の例>**
489HT3 : だけど なんとか ここに あの{免許を出す}**この免許なんですけれども**。(JF : はい){免許証の頁をめくる}
490HT3 : これが 国際免許なんですよ。
491JF : はい。
492HT3 : はんこが あるんですよ。

[15] [JH3](日本留学と生活)**<挿入の例>**
071JH3 : で あの なんというかな あの 僕も ま 実際に ま 五年前 東京で あのー(JF : ええ)SNGという あの 日本語 新宿(JF : ええ)日本語学校という ところで(JF : はい)あの ま 日本語 習ったんですけれども。
072JF : うん 五年前に 日本に 来たんですか。
073JH3 : あ はい。

교보문고 KYOBO Book Centre

074JF：ええ。
075JH3：あ いや あの で 五年前に 来てて(JF：はい)一年ーで 勉強 終えて(JF：はい)で 向こうに また 戻ってて(JF：はい)で あの こ 今年 四月↑(JF：はい)あのー ま 留学ー しｔ(JF：あ)ま 留学に **来たわけなんですけれども**。
076JF：その 新宿に 来る 前は 日本語とか 勉強してたんですか。

なお、学習初期のKSの談話資料には上の談話機能では分類不可の不明なものがある(例[16]参照)。このような形で用いられたケド類は意図された使用なのか、あるいは談話の展開と関連があるのか判断の難しいところである。今後さらに検討を加えて行きたい。

[16] [KS3](日本での旅行)**＜不明の例＞**
469JF：うんー で 私は まだ 韓国も 行った ことが ない。
470KS3：そうですか。え?
471JF：韓国は ないです。
472KS3：おー 一緒に 行ったら いい いいと **思いますけど**。{笑い}
473JF：案内してくれますか。
474KS3：はい {二人笑い} おー。
475JF：KSさんが あの 飛行機の チケットも 払ってくれたら{二人笑いながら}今 すぐ 一緒に いけますけど。
476KS3：おー 今、私の もの ありますけど{二人笑い}どうしよう。{笑い}

Ⅴ．まとめ

本研究は、韓国人日本語学習者のフォーマルな談話におけるテ・カラ・ケドといった、二つの文をつなぐ接続助詞の運用実態とその習得における特徴を、文法的、社会言語的、談話の諸側面から考察したものである。学習者は文としての独立性の強さを手がかりに、多義語など用法の広いものを先に習得するという文法的側面の結果を受けつぎ、社会言語的、また談話的側面を分析した結果

교보문고 KYOBO Book Centre

は以下のようにまとめられる。

まず、接続助詞と節末の丁寧語やノダ形式との共起関係の様相について、ケドとケレドモ、カラとノデ・ンデにおけるスタイルの認知と習得という観点から見てきた。次の2点が明らかになった。(Ⅲ節)

(1) 言語外的要因として、スタイルの認知とそれに対する対応が考えられる。ケレドモとケド、カラとノデ・ンデといったスタイルの対立が丁寧語との共起を制約するだけでなく、談話のフォーマリティが接続助詞の使用を左右する。
(2) ケレドモはノダ形式と共起した「ンデスケレドモ」がほとんどであり、カラやノデはノダ形式と共起しないことも多いが、節末の「ノダカラ」は話し相手を非難する意味合いを持つことがあるため回避されるといった言語内的要因が考えられる。その結果、ンデという新形式の習得が促進される。

次に、接続助詞終了型発話の使用実態をまとめ、接続助詞終了型発話の用法について学習者ごとの特徴を分析した結果、次のことが明らかになった。(Ⅳ節)

(3) 学習者に共通して現れるのは、対人関係と関連がある前置きの用法と終助詞の用法である。
(4) 日本語能力の高い学習者は、知識・伝達の側面に関わる提題用法、挿入用法が相対的に多い。これらは情報のやり取りの再構成などの役割を果たす。

以上で、本研究では社会言語的には会話の行われる場(談話のフォーマリティ)が接続助詞の使用を左右すること、意味的な制約により新しい形式を習得することを確認し、談話的には対人関係に対する配慮が情報の伝達より優先して習得されることを見てきた。学習者の文法能力は社会言語能力や談話能力と密接に関わっていること、学習者の文法能力と社会言語能力、談話能力などを総合的に捉える視点が要求されることを指摘した。

교보문고 KYOBO Book Centre

참고문헌

이은미(李恩美2012)「화용론적 관점에서 본『けど』의 문말의 사용양상」『일본연구』52, 한국외국어대학교 일본연구소, pp.361-380.

李吉鎔(2008)「韓国人学習者の日本語原因・理由表現の切換え能力の習得メカニズム」『日本研究』第24輯, 中央大学校日本研究所, pp.55-74.

李吉鎔(in press)「韓国人日本語学習者の接続助詞の習得様相」『日本学報』第96輯, 韓国日本学会.

宇佐美まゆみ(1997)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費 一般研究(C) 研究成果報告書, pp.12-36.

奥山洋子(2006)「日本語特技生の入学後の変化－接続助詞『けど』を中心に－」『日語日文学研究』第57輯 1巻, 韓国日語日文学会, pp.279-297.

小金丸春美(1990)「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71号, pp.182-196.

国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版.

佐藤勢紀子(1993)「言いさし「・・・が/けど」の機能―ビデオ教材の分析を通じて―」『東北大学留学生センター紀要』第1号, pp.39-48.

渋谷勝己(1997)「日本語学習者のスタイル切り替え－従属節の丁寧表現をめぐって－」『無差』4, 京都外国語大学日本語学科, pp.1-19.

白川博之(1996)「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号, pp.9-17.

高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12-10, pp.18-26.

曺英南(2000)「『けど』で終わる発話の語用論的研究－『言い終わり』の『けど』を中心に」『日本文化と日本語教育』第19号, お茶の水女子大学日本言語文化学研究会, pp.89-100.

辻村敏樹編(1991)『敬語の用法』角川書店.

野田春美(1995)「『のだから』の特異性」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版, pp.221-245.

永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』第3巻第2号, 社会言語科学会, pp.17-26.

朴仙花(2008)「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について」『言葉と文化』9, 名古屋大学国際言語文化研究科, pp.253-270.

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.

三原嘉子(1995)「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第2号, pp.79-89.

교보문고 KYOBO Book Centre

❖ 투고일 : 2013.06.29
❖ 심사완료일 : 2013.08.10
❖ 게재확정일 : 2013.08.16

KYOBO
교보문고

교보문고 KYOBO Book Centre